

I、実施結果

事業収益 22,747,068円

経常損益 9,604,633円

(1) 意味ある活動の構築

- ・日常と非日常の新しい取り組みを含め、より充実した支援の取り組み

→イベントの際に生活介護、放課後等デイサービス、居宅の利用者で一つの作品（横断幕）を作り、サービス外での利用者間の関わりを持つことが出来た。

- ・関係機関と連携し、意思決定支援を元にした活動の充実

→自立支援協議会のコアメンバーとして参加し、他事業所との情報交換の場を作り、連携できる体制を作る事が出来た。

(2) 福祉の担い手の種まき

- ・ボランティアに基づいた人間関係の構築

→協力法人と自発的に意見交換会を複数回行えた。

- ・施設の活動や研修を通し、理解者の拡充

→強度行動障害支援者養成研修を継続した。研修やアジール祭の参加者が職員として採用されるなど実践の理解者が少数ではあるが増えた。

(3) 福祉の心を広める活動

- ・福祉の縦の関係だけではなく、横の関係を創る

→アメニティーフォーラムへ受付業務として4名参加し、職員の人事交流も行えた。

→社会福祉法人昴、社会福祉法人清心会との3社福連携を継続して行った。

- ・障害福祉だけでなく、他機関多職種・地域住民との協働を通しての共生社会のカタリバの創造

→東京演劇集団風のバリアフリー演劇『Touch』イコス上尾での公演で地域住民、障害当事者家族など170人が参加した。

(4) 地域と響き合う法人運営

- ・福祉活動以外の地域組織との交流

→評議員のつながりで、イオンモール上尾が主催する上尾地域共創フォーラムに2名参加。

アジール祭バリアフリー映画アフタートークで市内のフリースクール、アトリエコルトを主宰する一般社団法人こどもとおとなのあそびとたいわと不登校の現状について意見交換を行う機会を設けた。

- ・BCPの訓練（自治会と合同訓練含む）

→自治会と合同訓練を行うことはできなかったが、施設で防災訓練を行った。

II、本年度の重点項目

(1) 職員の自立

→人事考課運用ルールの改訂だけでなく、職員成長計画表による自己研鑽の仕組みを改訂した。

(2) 事業活動内容の飛躍

→中長期計画にあるGH等の居住施設の整備について理事会の承認など前進がなされた。

(3) 居住施設整備プロジェクトの推進（土地選定、設計会社検討）

→土地の選定が完了し、建設会社の決定が行えた。居住施設整備プロジェクトを事業化するための準備が整い基本設計の下案作成が始まった。

(4) 意味ある活動の構築

→利用者の創作活動の可能性を探し、アジール祭で展示する機会を設けた。

(5) 福祉の担い手の種まき

→社会福祉士の養成校に求人票を出すためキャリアセンターに訪問するだけでなく、ソーシャルワーク実習受入を行えるよう養成校教員とコンタクトを取り、次年度の受入れにつなげた。

(6) 福祉の心を広める活動

→職員が共生社会フォーラムへ受講だけでなく、メンター(講師)として2名参加した。

(7) 地域と響き合う法人運営

→地域住民、行政職員等も参加したインクルーシブや福祉や環境を考える場としての「アジールサミット」を開催した。

III、理事長所感

令和5年度は人材確保と人材育成に力を入れた年度となった。施設開所当時より、人材の確保と育成については課題であり、人材採用ビジョン、採用計画の策定を行うもコロナ過が明け、求職者の減少もあり採用活動が思ったようにいかなかった。

重度障害者や自閉症支援の現場で求められる人材は、ソーシャルワークを基本とする体系的な福祉の専門性を学んだ者であるが、現実としては社会福祉士養成校も介護福祉士の専門校でも定員割れが起きており人材の確保は困難を極めている。

また、職員の退職と合わせてキャリアパス、育成についても多面的に検討を重ねる必要性が認識できた。

評価やキャリアパスについて検討する中で、職員全員が上昇志向や法令理解の能力が向上するわけではなく、多様性のある配置、育成及び評価の仕組みが必要であると考えられる。

職員採用が困難を極める中、人事担当職員による採用事故も起こり、担当職員だけではなく、組織全体の課題として取り組む必要性を痛感させられる事案となった。

今後は、コンプライアンスの遵守と決済等ガバナンスの再構築、管理職の研修や評価制度、管理職体制の見直しを行っていく必要がある。

他方、地域共生社会への取り組みとしては、10月1日にイコス上尾で開催した東京演劇集団風によりバリアフリー演劇『Touch～孤独から愛へ～』では利用者・家族だけでなく、地域住民や地域活動をしている近隣の方々総勢170名以上が参加をしてくれた。普段触れ合うことのない聴覚障害の方や演劇を観に行くことが難しいと感じていた当事者家族の参加なども含め、参加者同士、職員にも新しい出会いの広場となった。東京演劇集団風と全国地域生活支援ネットワークとで作上げてきた活動が当法人の地域でも実施できたことは非常に喜ばしことであり、参加した利用者、職員にとっても非日常の楽しい経験となった。

また、ほっと子どもBBQやアジール祭も回数を重ねそれぞれの取り組みの意味や体制について再検討がされた。自治会の方々や障害のある家族にとって共生や多様性の理解、出会いや再開の場にもなっている。職員にとっても地域の方や利用者家族と自発的に関われる機会でもあり、人材育成の機会としては今後どのようにこの機会を活用していくか検討しなければならない。人材育成を担当する管理者や管理職が工夫をこらし自分たち自身の成長の機会に生かしていければとも考える。

最後に、NPO法人時代から11年半運営してきた「えんじょい生活介護(旧らいふすぺーすえん)」が3月末をもって閉所・廃止となった。レスパイトサービスや行動援護・ヘルパー利用の特別支援学校卒業後の通所先として開設し、在宅だけでなく通所でも支援するという私たちの地域支援のターニングポイントになった事業所であり、行動障害や他事業所での受け入れの難しい利用者などへ事業所の機能として様々な取り組みをし、障害児者多機能施設アジールのコンセプトを考える上での基礎となった事業所でもある。人材確保の難しさからこのような結果になってしまったが、利用者の次の利用先が確保できたことだけは良かったと思う。様々な変化に迫られた令和5年度であったが、一番の評価すべきところはこのような厳しい環境の中、職員が力強く支援を継続できたことである。